家忠日記

十二之十一

リ 5
2687
5

2687
5

家忠日記追加巻之十　自天正十三年至同十七年

平井文庫

天正十三年乙酉

正月大

一日群臣濵松ノ城ニ登テ　大神君ニ謁シ歳首ヲ祝シ奉
二日夜ニ入濵雲ノ城ニ於テ御詰初有諸士参賀ス松
平主殿助家忠城ニ登テ著坐ス
十六日　大神君濵松ノ城ヲ出玉ヒテ三州岡崎ニ赴キ玉フ
二月小

一日　大神君岡崎ヨリ濱松ノ城ニ還リ入玉フ

五日　大神君ノ命ヲ奉テ三州一国ノ人夫ヲ以テ吉良ノ城ヲ築ク

三月大

秀吉内大臣ニ任シ正二位ニ叙ス　是ヨリ先秀吉自ラ平姓ト称ス内府ニ任スルニ及テ藤原ニ改ム

四月小

大神君甲州ニ渡御アリ

七月小

五日大地震

十一日秀吉関白ニ任ス

十九日　大神君駿府ノ城ニ来臨アリ

八月大

大神君大久保七郎右衛門尉忠世鳥丹竜右衛門尉元忠平岩七之助親吉岡部弥次郎長盛諏訪小太郎頼忠保科弾正正直屋代左衛門佐勝永三枚松平右衛門尉遠山知久下庄大草武田芦田等ニ命テ真田安房守昌幸ヲ計シメ玉フ各台命ヲ奉テ濱松ヲ発シ上田ノ城ニ赴ク其故ハ天正十年甲州若御子軍ノ時北条氏直

大神君ニ和ヲ請テ云甲信両国ハ全　大神君領納アルヘシ
上野ノ国ハ一圓ニ氏直是ヲ領スヘキノ旨ヲ約ス
大神君是ヲ許シ玉フ依之氏直カ取処ノ信州佐久郡
ヲ以テ　大神君ニ献ス然処ニ真田安房守昌幸上野
ノ国沼田ヲ領シテ今ニ至テ氏直ニ是ヲ渡サス依テ氏
直使ヲシテ　大神君ニ謂テ曰上野国一圓ニ氏直是
ヲ領スヘキノ旨先年ノ約違ニノ真田昌幸沼田ニアリ
是ヲ退キ渡サルヘキノ由ヲ許フ依之　大神君昌幸ニ御
使ヲ賜リ速ニ沼田ヲ避テ氏直ニ是ヲ渡スヘキノ旨ヲ命

セラル昌幸是ヲ恨テ台命ニ従ハス秀吉ニ志ヲ通ニ
大神君ヲ叛ク依之兵ヲ発テ昌幸ヲ攻撃シメ玉フ

閏八月小

二日御味方ノ軍勢真田安房守昌幸カ楯篭ル
上田ノ城ヲ囲テ攻討城兵曽テ是ヲ拒カス寄手ノ
兵是ヲ侮リ進テ二ノ丸ニ攻入ル時ニ城将真田父子士
卒ヲ指揮シ岡ヲ発テ一同ニ切テ出ル寄手ノ軍勢ヘ
キ易シテ進セス昌幸謀テ郷人ヲシテ招キ集テ紙
旗ヲサシメ火炮ヲ持シメ城近辺ノ谷ニ伏セ置ク此

兵急ニ起テ回ヲ発シ火炮ヲ発テ競ヒ掛ル其音山
彦ニ響テ夥ク聞ヘヨセテノ兵驚キ騒テ狼狽ス城
兵其利ニ乗テ急ニ戦ノ間寄手ノ兵悉ク敗亡ス大久
保忠世岡部長盛平岩親吉等返シ合ヲ相戦フ本
多主水正尾崎左衛門佐兄弟殿シテ退ク昌幸猶
勝ニ乗テ頻ニ追討ノ間尾崎兄弟蹈留リ奮戦テ
死ス鳥居元忠退テ高城ニ陣シテ暫ク敵ヲ相支ント
欲ト云ヒ敵戸倉ノ城ヨリ兵ヲシテ元忠カ陣ニ競ヒ掛
ル元忠カ軍危急ナルヲ見テ小見孫七郎大敵ヲ撃ク

支テ苦戦シテ遂ニ死ス其間ニ元忠退去ル大久保忠世
軍ヲ返テ戦ント欲テ加賀川ノ辺ニテ敗軍ノ士ヲ集
ト云ヒ味方ノ兵三百余人戦死ス残兵敗北シテ愛ニ近
ツカス大久保平助忠孝馳来テ忠世カ旗ヲ加賀川ノ
辺ニ集ル時ニ黒糸ノ鎧着タル敵一騎進ミ来テ忠孝
ト挑戦フ忠孝是ヲ突殺ス既ニシテ忠世カ旗加賀
川ノ辺ニ建ルヲ見テ松平七郎右衛門尉足立善一郎木
下隼人正太田源蔵松井孫四郎天野小八郎十塚久助
後藤物平氣多甚六郎江坂茂助天方喜三郎等馳

集テ其兵百余騎ニ及フ忠世是ヲ卒テ地利ニ陣ス左
ハ昌幸カ本陣右ハ亦敵ノ多勢鋒ヲ列テ戦ヲ挑氣ヲ
呑ム其間僅ニ七八間然ル処ニ昌幸カ軍士日置五左衛門
尉味方ノ陣ヲ驅破テ通リ去ント欲ス大河内善一郎
槍ヲ以テ鞍ノ前輪ヲ突ト云ヒ日置カ肌膚疵ツク
フナクシテ脱レ去ル昌幸加賀川ヲ前ニアテ暫ク陣
ヲ張ト云ヒ寄手ノ軍勢利ヲ失ノ間進テ戦ハス依之
昌幸兵ヲ収テ城ニ引入ル今日ノ戦ニ寄手ノ軍勢酒
井与九郎獨首級ヲ得テ戦功アリ

三日寄手ノ軍勢丸子ノ城ニ兵ヲ発テ筑摩川ヲ渉テ
八重原ニ陣ス真田是ヲ聞テ上田ノ城ヨリ軍ヲ発テ海
野ノ町ヨリ八重原ヲ経テ手白塚ニ軍ヲ出ス大久保忠
世是ヲ討ント欲テ紫田七九郎ト議シ鳥井元忠平
岩親吉カ陣ニ軍使ヲ馳テ軍ヲ催スト云ヒ元忠親吉
取テ進マス忠世勇ヲ押ヘテ八重原ニ比ス夫ヨリ後ハ
敵味方戦ヲ止テ互ニ城ヲ守リ陣ヲ整テ數日ヲ経
ル寄手ノ軍勢物見ノ番ヲ定テ交々ニ是ヲ守ル
十四日駿府ノ城経営ニ因テ　大神君ノ命ヲ奉テ松

平主殿助家忠駿府ニ至ル
十九日諸訪安藝守頼忠真田ト戰フ
廿日岡部弥二郎長盛此日物見ノ番也真田父子兵
ヲ卒テ丸子表ニ出張シ寄手ノ陣ヲ襲ヒ戰岡部
長盛軍ヲ発テ奮戰フ真田遂ニ利ヲ失ラ城中ニ
引退ク長盛城兵数十人ヲ討捕テ首級ヲ得タリ長盛
從士ヲシ其首ヲ持シメ濱松ニ是ヲ献ス　大神君其戰
功ヲ褒サセラレ長盛ニ御感状ヲ賜ル
今度於丸子表自分手拵仕之義感入ノ深ニ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
岡部弥二郎

寄手ノ軍勢真田昌幸ト對陣スルヿ日久シ然ト云ヒ
其利ナキニ因テ士卒皆氣屈シ疲労スルノ由
大神君ノ台聽ニ達ス依之大須賀五郎左衛門尉康
高井伊万千代直政松平周防守康重上田ノ城ヲ相

囲ム軍勢等兵ヲ攻テ軍ヲ返サシムヘキノ旨釣
命ヲ奉テ康高直政康重等濱松ヲ発テ上田ノ
城ニ至ル廿日余真田ト對陣シ味方ノ軍勢戰ニ利ヲ
失フ先日ノ恥ヲ雪ント城中ノ虚ヲ窺ヒ襲攻ント欲ル
ノ処ニ昌幸兼テ志ヲ秀吉ニ通シ援兵ヲ請フ依之上
杉景勝秀吉ノ旨ヲ受テ數万騎ノ軍勢ヲ卒シ近
日上田ノ城ニ援兵ノ由其聞ヘアルノ間康高直政康重
等前ニ堅城アリ後ニ大敵有退カンニハ不如ト謂テ兵
ヲ収テ皈リ去ル昌幸カ兵ヲ押ンカ為大久保忠世小諸
ノ城ニ留テ是ヲ守ル信州ノ兵保科諏訪六草知久
下条等各己カ舘ニ帰テ昌幸カ勢ヲ拒テ城ヲ守ル

九月大

十八日　大神君三州田原ニ狩シ玉フ

十月小

三日　大神君田原ヨリ駿府ニ皈玉フ

廿七日　大神君ノ召ニ依テ松平主殿助家忠濱松ニ参候

廿八日　家忠濱松ノ城ニ登ル　大神君諸将ヲ御前ニ召テ
命有テ云京都ニ人質ヲ差シ上セテレ宜シカルヘキ

ヤ否ヤ群議ヲ問セ
セ置ニ玉フヘキノ宜ニ
言上ス　大神君モ並
質ヲ上セ玉フ儀ヲ
人各起請文ヲ　大
等及国衆ニ命テ
ニ賜ル

十一月

十三日石川伯耆守

ノ城ヲ避テ京都ニ出
平主殿助家忠カ居
テ行程三里　家忠聞テ兵
鞭テ岡崎ニ馳着
テ尾州ニ退ノ間家
州ノ諸士イマタ一騎
テ岡崎ノ城ヲ警衛
十四日辰ノ刻酒井左
崎ノ城ニ馳集石川

つ諸大名ト同ク質ヲ京都ニ上
カルヘシキノ旨各異口同音ニ
テ此御賢慮タルニ因テ京都ニ
ル然ルニ北条氏直カ家臣平
神君ニ献ス依之　大神君老臣
起請文ヲ書シメ北条カ家臣等
正妻子を携ヘ三州岡崎

弁ス（数正京都ニ上テ秀吉ニ属ス）夜ニ入次ノ刻松
城深溝ニ其告アリ（深溝ノ城ヨリ岡崎ノ城ヘ）
卒テ深溝ノ城ヲ発シ汗馬ニ
ト云ヒ今昼石川数正城ヲ避
先新城七之助カ構ニ陣ス三
七来ラス依之家忠従卒ヲ配
ス
門尉忠次其余三州ノ諸将岡
正ニ異テ岡崎ノ城ヲ避ケ退シ

ト欲スルノ間松平源次郎カ臣松平五左衛門近正カ
許ニ竊ニ家人天野又左衛門ヲ遣シ數正ニ同意タルヘ
キヿヲ請フ近正聽カス使重テ来ラハ必是ヲ討殺シ
ト欲ス數正其形勢ヲ察シテ再ヒ使来ラナシ其ノ日
數正遂ニ岡崎ノ城ヲ去ル依之近正　大神君ノ御疑
心有シヿヲ恐テ此日近正カ愛子新次郎一生ニ源次
郎カ家臣二人ヲ相副濱松ニ赴カシメ此事ヲ委細
ニ注進ス新次郎一生ハ質トシテ濱松ニ留ル其後
大神君遂ニ一生ヲシテ濱松ヨリ大給ニ返サシメ玉フ

時ニ命有テ曰今度近正逆臣數正ニ与セス忠義ヲ守リ
去年鰈江ノ城ニシテ軍功ヲ尽ス其忠功ヲ美稱セラレ
新次郎一生ニ御膝指ヲ玉ハル
十五日伯耆守數正岡崎ノ城ヲ出奔スルニ依テ
大神君濱松ノ城ヲ御進発有テ吉田ノ城ニ着御此
日　大神君御書ヲ北条氏直ニ賜ル
以飛鳥ト又ハ重ニ二科左ニ出ル[illegible]
十三日[illegible]
人質[illegible]

[illegible]

十二日 十五日

小條原

十六日 大神君岡崎ノ城ニ渡御有三州ノ諸士群参ス時
ニ松平主殿助家忠ヲ召テ命有テ曰今度数正不慮ニ
岡崎ノ城ヲ出奔スルノ処ニ家忠獨速ニ馳来テ城ヲ
警衛スルノ条忠義ヲ励シ常ニ武備不怠ノ故ニ事
ニ至テ卒ニ應スルノ旨甚以御感悦アリ是武門ノ面

目也ト人皆美補ス則家忠休暇ヲ賜テ深溝ノ城ニ帰
十八日 大神君三州ノ諸将ニ命シテ岡崎ノ城ヲ修補ナサ
シメ玉ヲ松平主殿助家忠カ監スルノ取其支速ニ成
大神君御使トシテ松平金次郎ヲ家忠カ許ニ玉ハリテ速
成ノ功作ヲ褒シ玉フ
廿一日 大神君主殿助家忠及三州ノ諸将ヲ岡崎ノ城ニ
召テ美膳ヲ賜ル
此日 大神君西尾ノ城ニ渡御アリ
廿七日 大神君西尾ヨリ岡崎ノ城ニ還御

十二月小

三日信州ニ於テ小笠原右近大夫貞慶三千余ノ兵ヲ率テ保科彈正正直カ居城高遠ノ城ヲ囲テ攻撃テ正直拒戦テ大ニ利ヲ得敵ヲ多ク討取貞慶敗テ軍ヲ退

十四日大神君高遠ノ城ニ於テ正直カ戦功ヲ褒サセラレ御感状并御腰物包永ヲ正直ニ賜ル

今度小笠原右近大夫企逆意到テ表ニ備ヘ而逆ニ戦敵隨一ニ者取為被討捕之由酒井左衛門尉家ヘ注ス上状得ニ意ヲ誠於骨

ニ至テ正直カ内ニ刀一腰包永進シ給ヒ程左衛門尉ヲ以テ上ニ得ニ

十二月十四日　家康

保科彈正殿

北畠信雄ノ使者羽柴下総守勝雅土方勘兵衛雄久来テ大神君ニ言テ云信雄既ニ秀吉ト交和事成ヌ秀吉ト大神君素ヨリ怨憎ナシ唯一時ノ爭ヲ以テ暫ク中絶ス大神君御人洛有テ秀吉ト和融アラハ秀吉ノミニ非ス信雄モ亦大悦タルヘキノ旨両使言ヲ尽ストニ云ヒ

大神君敢テ是ヲ御許容ナシ依之両使事ナラスシテ帰リ
上ル此年青山藤七郎忠成後常陸介ト号ス大神君ノ釣命ヲ奉
台徳院殿ノ傅トナル浅井半兵衛尉鴨田権右衛門尉滝
六蔵等忠成ニ従テ頁抱ノ助ト成

天正十四年丙戌

十二月小

朔群臣濱松ノ城ニ登テ大神君ニ謁シ正旦ヲ賀ス
二日夜ニ入濱松ニ於テ御詰初アリ諸士参候ス

十三日大神君御書ヲ武川ノ諸士ニ玉ハル

大久保新十郎本多平八郎・大神君ノ命ヲ奉テ書ヲ

武川ノ諸士ニ送ル

十九日 大神君三州吉良ニ蒐シ玉フ

廿一日 秀吉羽柴下総守勝雅ヲ使トシテ 大神君ノ御上京ヲ請フ勝雅吉良ノ御旅館ニ来テ 大神君ニ謁シ秀吉カ使ノ意趣ヲ達ス 大神君命有テ曰我何ソ洛ニ至テ秀吉カ家風ニ歩ンヤ勝雅言ナクシテ寄宿ニ退キ亦翌日御旅館ニ参候シテ御返答ヲ請フ大神君勝雅ヲ怒玉テ汝イマタ去スヤ早ク皈洛スヘシ下總守言ヲ尽シテ御上洛ヲ勧奉ト云ヒ 大神君敢テ是ヲ許シ玉ハス大ニ御憤有テ汝無用ノヿヲ以テ我ニ説今ヨリ後世ニ来ルヿナカレ若又来ラハ汝カ命危カルヘキノ旨ヲ命セラル依之勝雅御返答ヲ聞カズ徒ニ帰リ上ル勝雅其事ナラス秀吉聞テ是ヲ怒ンヿヲ深ク懼ナカラ大坂ノ城ニ登テ詳ニ是ヲ言フ秀吉敢テ怒ラズ 大神君ノ旨然リ吾重テ深ク慮テ 大神君ノ御入洛ヲ招クヘシト謂テ勝雅ヲ宿取ニカヘス其夜深更ニ及テ秀吉急ニ勝雅ヲ呼フ信雄モ亦招レテ共ニ大坂ノ城ニ登ル秀吉寝取ヨリ出ル手ニ脇指并ニ細紅ノ帯ヲ提ケ一童燭ヲ秉

テ從フ信雄及勝雅ニ秀吉語テ曰吾　大神君上京ノ慮
アリ天聞ニ驚言フ支ナシ秀吉ノ云ク吾妹ヲ以テ
大神君ニ嫁セシムヘシ猶疑心アラハ吾母大政所ヲ質
トシテ濱松ニ赴カシメン然ラハ何ソ　大神君ノ疑散テ
入洛ナキト云事有ンヤト謂テ重テ勝雅ヲ使トシテ
濱松ニ赴カシム勝雅大阪ヲ発テ先三州吉田ニ至テ酒
井左衛門尉忠次ニ来會シテ此儀ヲ談シ即忠次ト相伴
テ濱松城ニ参候シ　大神君ニ謁セント請　大神君汝
又来レリ何ソ是ニ逢ンヤト怒玉フ時忠次使ノ趣賀

儀也強テ御對顔アルヘキノ旨ヲ言依之　大神君勝雅
ヲ召ス勝雅秀吉ノ意ヲ述　大神君是ヲ諾シ玉フ勝雅
悦テ京都ニ皈テ秀吉ニ告ル秀吉亦大ニ喜フ

二月大

廿四日　大神君ノ召ニ依テ松平主殿助家忠濱松ニ参候ス
廿六日　大神君北条氏政カ異心試玉ンカ為相州ニ御進
発アリ此日駿府ニ着御家忠鎌田ニ陣ス

三月大

廿一日　大神君相州ヨリ濱松ノ城ニ還入玉フ

十月大

四日 大神君權中納言ニ任シ玉フ

十三日 大神君濱松ノ城郭首途洛ニ赴セ玉フ本多平八郎忠勝榊原小平太康政酒井左衛門尉忠次阿部善右衛門尉三勝（後伊勢守ト号）永井右近大夫直勝鳥井彦右衛門尉元忠西尾隠岐守吉次牧野讃岐守等供奉ス

十四日 大神君吉田ノ城ニ着御

十五日 大神君岡崎ノ城ニ着御此城ニ御滞坐有テ京都ヨリノ貢秀吉ノ母堂大政所ヲ待セ玉フ

十七日秀吉ノ質大政所明十八日岡崎ニ下着有ニ因テ松平主殿助家忠従士ヲ率テ池鯉鮒ノ駅ニ出迎ヘキノ旨大神君ノ台命ヲ奉テ家忠先岡崎ノ城ニ参ノ候ニテ大神君ニ謁シ夜ニ入岡崎ヲ発テ池鯉鮒ノ駅ニ赴ク

十八日主殿助家忠池鯉鮒ノ駅ニ至テ大政所ノ乗輿ヲ警固シ岡崎ノ城ニ入ニム時ニ大政所ヲ見知ル人ナシ若秀吉ヲ欺ント謀ヲ知ラス諸人皆ヲ濱松ヨリ岡崎ノ城ニ召テ大政所ニ對顔アリ依之其疑ヲ散ス

廿日　大神君岡崎ノ城ヲ御首途洛ニ赴カセ玉フ家忠
御送トシテ宇當ノ郷迄供奉ス家忠御馬一疋馬衣紅梅
形色割リマセ　大神君ニ献シ暇ヲ告テ深溝ノ城ニ皈ル
大神君御帰国ノ間ハ大政所ヲ質トシテ岡崎ノ城ニ留
置ル井伊兵部少輔直政本多作左衛門尉重次是ヲ警
固ス薪柴ヲ其屋ノ傍ニ積ム若秀吉京都ニ於テ
大神君ニ對テ異心アラハ大政所ヲ焼殺スヘキノ為也
廿六日　大神君大阪ニ着御先美濃守秀長カ宅ニ入御
アリ即日秀吉彼宅ニ来テ　大神君ニ謁見シテ御手ヲ執
テ旅中ノ御艱難ヲ労ラヒ秀長ヲシテ饗應ヲ掌ラシ
ム善ヲ尽シ美ヲツクス
廿七日　大神君大阪ノ城ニ渡御アリ秀吉庭上ニ迎ヘ奉ル
尾州ノ内府信雄同ク城ニ登ル　大神君信雄ニ礼アリ
テ先ニ行玉ハス信雄辞テ歩マス秀吉・大神君ノ御
手ヲ執テ信雄ヨリ先ニ　大神君ヲ請シ入レ奉ル
大神君ノ家臣等秀吉ノ旨ラウケテ皆室内ニ入ル秀
吉ノ臣ハ敢テ入ヲ得ス秀吉　大神君ト共ニ天守ニ
登玉フ奇貨雜珍是ヲ委積ス利休ヲシテ茶ヲ

點セシム饗食應畢テ後　大神君暇ヲ告テ還リ玉フ
時ニ秀吉太刀并茶壺（白寶ト号）ヲ以　大神君ニ進セラル
且宅地ヲ聚楽ノ郭内ニ進ラセ、大神君ノ家臣等
ニ各屋地ヲ賜ル美濃守秀長秀吉ノ旨ヲ受テ
大神君ノ御舘大臺取并ニ門ヲ造ル藤堂与左衛門
尉高虎（後佐渡守又和泉守ト改）是ヲ監ス

十一月小

五日　大神君正三位ニ叙シ玉フ
七日　譲位
九日　榊原小平太康政従五位下ニ叙シ式部大輔ニ任ス
十一日　大神君御帰国ニ因テ松平主殿助家忠大高ニ迎ヘ
奉テ　大神君ニ謁シ御帰国ヲ賀シ奉テ岡崎ノ城ニ供
奉ス若君濱松ヨリ岡崎ノ城ニ渡御有テ　大神君ノ
還御ヲ待セ玉フ
十二日　大神君御帰国タルニ因テ大政所モ亦大坂ニ帰リ玉
フ御送トシテ丹伊直政ヲ相副ラル日ヲ歴テ大坂ニ至
ル時秀吉直政ヲ城ニ招テ饗食應ス石川伯耆守数正
ヲ以テ相伴トス直政数正カ不美ヲ悪テ一日竟ルヘテ

終ニ一語ヲ通セス其後秀吉茶ヲ直政ニ賜ル時ニ又数正ヲ以テ相伴トス直政秀吉ハ家臣等ニ謂テ云ク人面獣心トハ此数正カ事也普代ノ主ニ背キ秀吉ニ属ス不義ト云ヒ怯弱ト云ヒ武士ノ相交ルヘキ者ニ非ス是ヲ聞テ諸人数正ヲ笑ヒ恥シメ直政カ豪氣ヲ大ニ美称ス

十二月大

四日　大神君濱松城ヨリ駿府ノ城ニ移玉フ即家人等月迫タルノ間家ヲ駿府ニ移ス者少シ大久保忠隣等コレニ従フ其余ノ諸士年ヲ踰テ各移住ス

此年内藤紀伊守信正ヲ大番頭トナサル時ニ信正十九歳内藤三左エ門尉信成カ嫡子此年大須賀五郎左衛門尉康高カ娘ヲ以阿部善右衛門尉正勝後伊与守ト号ス カ次男左馬助忠吉ニ嫁ス康高ト正勝連年交深ノ朋友ナリ依之康高　大神君ノ命ヲ伺ヒ請テ婿トシテ横須賀ニ忠吉ヲ招ク

天正十五年丁亥

正月小

朔　諸士駿府ノ城ニ登テ　大神君ニ謁シ正旦ノ賀儀ヲ献ス

二日夜ニ入駿府ノ城ニ於テ御詰初有諸士参賀ス
七日信州ノ真田及小笠原等秀吉ニ謁見ノ為上京
スルニ因テ　大神君酒井左衛門尉忠次ヲ以是ニ相副
ラル忠次真田小笠原ヲ携ヘ駿府ヲ出テ洛ニ赴
廿日駿府ノ城経営松平主殿助家忠是ヲ監スヘキ
ノ旨大神君ノ命ヲ蒙ル
廿六日主殿助家忠召ニ依テ駿府ニ到
二月大
五日駿府ノ城二ノ曲輪経始家忠是ヲ監ス

十三日二ノ曲輪経営成ル
三月大
十八日酒井左衛門尉忠次大坂ヨリ駿府ニ帰ル
四月小
廿五日駿府本城ノ経営ナル
此月秀吉師ヲ帥テ豊前筑前ノ境岩石ノ城ヲ攻
大神君本多豊後守廣孝ヲシテ軍ノ雌雄ヲ問シメ
玉フ廣孝能戦テ軍功アリ秀吉是ヲ褒メ金鐔
ノ脇指并ニ羊ノ皮ノ羽織ヲ廣孝ニ授ク

五月大

廿三日 松平備後守清善卒ス 八十三歳

七月小

十七日 大神君駿府ノ城ヲ御首途洛ニ赴セ玉フ

十九日 大神君三州岡崎ノ城ニ着御主殿助家忠

岡崎ニ參候ニ城ニ登テ 大神君ニ謁ス

晦日秀吉水野忠重ヲシテ豊臣氏ヲ授ケ

従五位下ニ叙シ和泉守ニ任セシム

八月小

八日 大神君大納言ニ任シ玉ヒ同日正二位ニ叙シ玉フ

十日 大神君洛ヲ出御有テ御帰国ニ赴セ玉フ

晦日 大神君三州岡崎ノ城ニ着御家忠城ニ登テ

大神君ニ謁シ御任官ヲ賀奉ル

十七日 大神君駿府ノ城ニ還御

九月大

十七日 来月朔日ヨリ駿府ノ城ヲ修セラルヘキ由ヲ

諸士ニ觸催ス

十九日 大神君三州田原ニ獵シ玉フ今日小松原ニ着御

十月小

七日　大神君ノ命ヲ奉テ駿府ノ城駒ノ段ニ石ヲ畳ム主殿助家忠是ヲ築ク

十一月

三日　駒ノ段ノ石垣成ル

四日　主殿助家忠今日ヨリ駿府城二ノ曲輪ノ石垣ヲ築

十五日　大神君酒井左衛門尉忠次カ宅ニ渡御アリ饗

饗美ヲ尽ス日終猿楽御見物アリ夜ニ入戌ノ刻

ニ及還御アリ

十二月小

廿八日　大神君兼左近衛大将同日左馬寮ノ御監

此年松平源二郎（于時十三歳）大神君ノ御前ニ於テ元服御

諱ノ字ヲ賜テ家乗ト号ス

此年青山藤七郎忠成ニ与カノ士ヲ附ラル其隊廿

五人（是ヲ久能衆ト云）

天正十六年戊子

正月大

一日 群臣駿府ノ城ニ登テ 大神君ニ謁シ正旦ノ祝ヒ奉
二日 夜ニ入例ノ如リ御謡初アリ
三日 未ル十五日ヨリ駿府ノ城経営ヤリ主殿助家忠
是ヲ修スヘキノ旨台命有ノ由酒井忠次家忠ニ告ル
廿八日 家忠駿府ニ参候
廿九日 大神君中泉ヨリ駿府ノ城ニ至ラ

二月小

四日 駿府ノ城経始
五日 大神君中泉ヨリ駿府ノ城ニ還御

廿八日 大神君御上京トシテ今日駿府御首途アルヘキノ
旨ニ依テ相催サル、処ニ甚雨ニ因テ御延引アリ

三月大

一日 大神君駿府ノ御着遠洛ニ赴セラル昔中泉ニ着御
十四日・大神君今日岡崎ノ城出御先日ヨリ岡崎ノ城
ニ御滞坐
十八日 大神君御入洛

四月小

三日 博多ヨリ壹弐芋頭ノ水指小壺小鳥ノ天目羽箒ノ茶

初及栗三千俵ヲ秀吉ヨリ・大神君ニ進セラル
十四日・関白豊臣秀吉聚楽ノ家ニ行幸有依之今度
大神君御上京アリ此時ノ・大神君ノ臣井伊兵部少輔直政
従五位下ニ叙シ侍従ニ任ス大沢兵部大輔基宿従五位下叙シ
侍従ニ任ス本多中務太輔忠勝酒井兵部大夫忠世(イ脩)大久保
治部太輔忠隣平岩主計頭親吉本多豊後守廣孝岡
部内膳正長盛菅沼大膳大夫牧野右馬允康成等各従五位下叙
廿七日 大神君京都ヨリ駿府ニ還御
五月大

六日北条氏政ト秀吉和儀破ル
十二日駿府ノ城天守ノ経営家忠ヲ監ス其事速ニ成
大神君ヨリ褒セラル家忠ニ御使賜ル
閏五月大
十日 大神君御曖ニ依テ北条氏政ト秀吉和睦成
六月小
廿三日大政所(秀吉ノ母堂也)疾病ノ告アルニ因テ 大神君洛ニ赴ン
ト催玉フ 大神君ノ御臺(秀吉ノ妹ナリ)夜ニ入駿府ヲ出洛ニ赴玉フ
八月小

七日北条氏政和儀成ニ因テ使ヲ秀吉ニ遣ス其使者北条美濃守宅駿府ニ至ル榊原式部太輔康政成瀬藤八郎両輩京都ノ案内者トシテ美濃守ヲ伴フ今日三州岡崎ニ到ル

十五日榊原康政成瀬藤八郎北条美濃守ヲ携ヘ大坂ノ城ニ登ル秀吉出テ美濃守ニ見ユ時ニ美濃守謂テ曰氏直来年上洛セント欲ス先年　大神君ト諾スル所ノ上野国沼田弥氏直是ヲ領スヘキ由ヲ請フ秀吉ノ曰　大神君ト氏直国境ノ約吾是ヲ委リ知ラスカサ子テ氏直カ臣ヲ指上セ猶其子細ヲ達スヘシ美濃守暇ヲ賜テ大坂ヲ発ス美濃守小田原ニ帰此旨ヲ氏政氏直ニ告依之氏直其後亦坂部岡江雪齋ヲ使トシテ大坂ニ赴シメ沼田領内ノ事子細ヲ述テ是ヲ請フ来年天正十七年臘月ノ初旬氏直必上京シテ秀吉ニ謁見セント相催ノ由ヲ達ス依之秀吉沼田ヲ氏直ニ与ント諾シテ来年必氏直上京スヘキノ旨ヲ堅ク江雪齋ニ約ス江雪齋悦テ小田原ニ皈ル

九月大

四日秀吉ノ母堂病愈ユ依之　大神君京都ヨリ御帰国

今日三州大津ニ着御正殿助家忠大津ニ參候シテ大神君ニ謁
十一日 大神君駿府ノ城ニ還御
十一月大
廿二日 大神君岡崎ノ城ニ渡御有三州ノ諸士岡崎ノ城ニ
登テ大神君ニ謁ス
十二月小
廿日 大神君參州吉良ニ狩シ玉フ
廿二日 秀吉ノ使者吉良ノ御旅舘ニ来ル秀吉鷹ヲ
大神君ニ進セラル

廿四日 大神君岡崎ニ皈玉フ
此年奥平信昌カ次男千時十歳駿府ノ城ニ登テ始テ大神君ニ
謁ス時ニ松平ノ姓御諱ノ字ヲ賜リ從五位下ニ叙シ右京大
夫ニ任シ家治ト号ス上州長根ニ於テ采地ヲ賜ル是
大神君ノ外孫タルニ因テ也此時同ク信昌カ四男千時六歳
後下總守ト号ス 台徳院殿ノ御前ニ召テ松平ノ姓ヲ拜受シ御諱
ノ字ヲ賜テ忠明ト号ス
此年土屋総蔵忠直後民部ト号ス始テ大神君ニ謁ス台命ニ因
テ越後ノ将忠輝後越後ノ将ト号ス慈母長覚院養テ子トス文惣蔵昌

恒生害ノ後甲州ヨリ駿州ニ来テ蟄居スルヿ七年遂ニ　大神君ニ謁ス　此年　大神君ノ釣命ニ因テ酒井左衛門尉忠次カ三男小平次郎後小笠原左衛門佐信元ト号ス小笠原掃部助信嶺養テ子トシテ其家督ヲ継シム

天正十七年己丑

正月大

朔駿府ノ城正旦ノ賀儀例ノ如ク諸士城ニ登テ　大神君ニ謁

二日夜ニ入駿府ノ城ニ於テ御詰初有リ松平主殿助家忠城ニ登テ着坐ス

廿八日駿府ノ城経始

廿九日　大神君中泉ニ狩シ玉フ

二月小

四日　大神君中泉ヨリ駿府ニ還御

五日　大地震駿遠両国ノ民屋タタ破倒ル

十二日　大神君今月廿四日御上洛有ヘキノ旨諸士ニ觸催サル

十三日信州真田カ男駿府ニ来リ城ニ登テ　大神君ニ謁

廿四日　大神君今日ノ御上洛暴雨ニ因テ御延引有テ明後

廿六日御首途有ヘキノ由ニ定ラル

廿六日 大神君ノ母公御病痾ニ因テ御上京今日モ亦御延引
廿八日御大方御病気御快然ニ依テ 大神君今日駿府ノ
城御首途洛ニ赴キ玉フ此日田中ニ着御

三月大

七日 大神君御入洛

十五日内藤政長従五位下ニ叙シ左馬助ニ任ス 自是先天正十
氏ヲ改長
ニ授ル

四月小

十日駿府ノ城経営成

五月大

十九日 若君 台徳院殿ナリ ノ御母堂 西郷ノ局 駿府ニ於テ振遁去
廿三日西郷ノ局振遁去ニ因テ主殿助家忠駿府ニ赴
廿四日西郷ノ局葬礼ノ支配龍泉寺 後宝台院ト改ム ニ於テ執行セラル
廿七日秀吉ノ妾 浅井備前守長政カ女 男子誕生ス 具名ヲ鶴松トイフ 群臣参賀

六月小

四日 大神君秀吉ノ甥誕生ノ賀ニ玉ハンカ為洛ヲ出ス
夜ニ赴キ玉フ
五日秀吉黄金二百枚白銀二千枚ヲ以テ 大神君ニ進セラル

六日、大神君大坂ヲ出玉ヒ御帰国ニ赴玉フ
十日　大神君駿府ニ還入玉フ
廿二日大須賀五郎左衛門尉康高卒去ス六十二歳

七月大

九日　大神君来月十二日ヨリ富士山ノ材木引下スヘキ旨主殿助家忠及諸将ニ令催サル其故ハ天正十四年ヨリ秀吉洛ノ東山大仏殿ヲ建立ス仏像漸ク成ル然ルニ仏殿ノ棟木ナシ依之四国九州岐嶋山飛弾山ニ求ルト云ヒ是ナシ工人ヲ富士山ニ登セテ見セシムルニ棟ニナルヘキ大木有工人京都ニ帰テ秀吉ニ告ル依之秀吉使ヲシテ　大神君ニ此木ヲ請大神君是ヲ諾シ玉ヒ諸将ヲ召テ人夫ヲ集メシメ此木ヲ富士山ヨリ引出スヘキ旨也

十七日富士山材木ノ役ニ依テ家忠人夫ヲ率テ駿府ニ赴

十九日家忠及諸将各駿府ニ着旅服ヲ更城ニ登テ謁
大神君ニ時ニ命有曰人夫等ハ明廿日大宮ニテ差遣シ家
忠ハ暫駿府ニ留テ明後廿一日井伊直政カ宅ニ渡御有猿
楽　台覧可ル供奉シテ是ヲ見物致スヘキ旨鈞命ヲ
蒙テ城ヲ退出ス

廿一日、大神君幷伊奈部大輔直政カ宅ニ渡御有テ猿楽御見物布ヘキノ旨兼テ相催サレ・ト云ヒ今暁ヨリ甚雨ニ因テ御延引アリ

此日秀吉富田平右衛門尉後左近将監ト号ス津田四郎右衛門尉後隼人正ト号ス・ヲ両使トシテ東国ニ赴カシム其故ハ去年秀吉氏直ト約スル処ノ上野国沼田ノ城ヲ以テ真田昌幸是ヲ氏直ニ避渡スヘキノ旨也両人先ツ駿府ニ至テ大神君ノ賢慮ヲ伺フ大神君神原式部大輔康政ヲシテ両使ニ副ヘ真田カ舘ニ赴カシメ玉フ三使真田カ舘ニ至テ勅命ヲ述ル真田命ヲ従テ沼田ノ城ヲ北条ニサケテ渡ス廿六日大神君幷伊直政カ宅ニ渡御有テ猿楽御見物アリ松平主殿助家忠及諸将ヲ彼舘ニ召ス各参候ニ命ニ因テ是ヲ見物猿楽十番畢テ夜ニ入還御

八月大

二日富士山ノ材木引出ス二因テ主殿助家忠及遠参ノ両国ノ諸将各奥津ニ至ル・

七日大神君富士山ヨリ引出ス処ノ材木御覧ノ為今日大宮ニ着御家忠大宮ニ迎ヘ奉テ・大神君ニ謁スル是ヨリ

大神君甲州ニ赴セ玉フ

九月小

十八日　大神君甲信両国ノ人夫ヲシテ甲州東郡ノ城ヲ築カシメ玉フ依之富士山ニ在テ公役ヲ勤ル甲信ノ人夫等甲州東郡ニ皈集テ城ヲ築ク駿遠参ノ人夫等ハ富士山ニ留居テ十月ニ至テ遂ニ彼木ヲ引出ス

廿六日　大神君甲州都留郡中窪根津等ノ所ヲ即巡見時ニ鳥居彦右衛門尉元忠白銀十枚綿百把漆百桶ヲ献ス

十一月大

三日北条氏直沼田ノ城ヲ請取同姓安房守氏邦ヲシテ沼田ノ城ニ居ラシム

爰ニ沼田ノ近辺那久留美ノ城ハ真田昌幸是ヲ領ス安房守氏邦カ家人ニ猪股能登守トネ者アリ猪股小平六範綱カ後ニシテ短慮至愚ナル血氣ノ勇者也沼田ノ近境ニ那久留美一城ヲ残テ氏邦是ヲ領セサルヿヲ悔テ猪股卒尓ニ兵ヲ発テ那久留美ノ城ヲ攻討ツ城ヲ守ル所ノ番兵微勢タルニ依テ即時ニ城ヲ陥サレ遂ニ那久留美ノ城ヲ押領ス此事京都ニ對シテ逆意タリ其

上氏直沼田ヲ請テ領スルニ於テハ必上京スヘキ旨カ
タク是ヲ約スルノ処ニ其約ヲ変スルノ由京都ニ聞
ヘ秀吉大ニ怒テ軍ヲ東国ニ発シ北条父子ヲ追治
セント催ス北条是ヲ聞テ石巻左馬允ヲシテ京都ニ
赴カシメ陳謝シテ云今度那久留美ノ城ヲ攻ル事
全ク北条父子カ下知ニアラス外様ノ家人等不案内
ニシテ其子細ヲ知ス攻テ此儀ヲ得ルノ幸忽ノ至リ
其憚多キノ旨ヲ述ト云氏秀吉憤テ敢テ許サス
使ノ石巻左馬允ヲ搦ニシテ相州ニ帰サス

七日富士山ノ材木引出スノ人夫等駿府ニ帰ル

廿四日秀吉書ヲ氏政氏直父子ニ与フ

一北条堂頃年葭如朝廷而不上洛在関東任
己意甚狼藉故去年欲討之而駿河大納言以
其婚姻故屢有乗請是以示條數則彼既謝之而其
族美濃守来執謁畢

一先年駿河大納言乗被定之條數條美濃守言表裏
相違今吾見美濃守閙国境等事論須正経界彼
使板部岡江雪上京乃尋向之則大納言与北条国境之

約如何哉甲斐信濃諸城者大納言以戰功可被取之
上野国者北条可領之所告定如此大納言既取甲信
西上野沼田者北条弱不能取之而言大納言違約
寄事于左右未及上京何哉今可授沼田於北条
雖然真田取素知之上野国中三分二附沼田須
与北条三分一者須附真田其中有城郭者真田
可守之而彼三分二之替地自大納言可授真田如此
相定北条上京乎取其書札而後可遣使節授沼
田江雪聞其旨而帰

一今年十二月上旬氏政須来執謁既捧翰依之吾遣津
田四郎右衛門尉富田平右衛門尉附与沼田於彼

一彼取沼田之後吾想如一翰之約彼當入京不然彼
攻取真田領内之那久留美城彼表裏背約吾何
見彼使者乎

一我自弱冠在信長之幕下馳驅山野枕干戈攻城野
戰夙夜不怠竭忠励功中年受呈恩以顯其名奉
命征伐西国之間明知日向守光秀叛逆弑信長吾
聞此事急決西国之雌雄以得利運不日帰洛

早誅光秀仰報君恩其後柴田修理亮勝家欲覆
国家吾亦已誅之其餘叛者伐之降者近之諸方
皆無不属吾麾下者吾亦未嘗有一言之違約
故天命乎吾既與龍登鷹揚之譽為鹽梅
則闕之人萬機委我百官總己獨氏直背天戻
理奸媒不庭何不罰之乎普天率土違勅之輩
不可不速誅之来歳吾操節旄而進発當刎氏直
首

廿九日　大神君駿府ヲ御首途洛ニ赴キ玉フ此日田中ニ着御
同日小笠原摂津守安元（始名新九郎）卒去ス
此月酒井小五郎家次従五位下ニ叙シ宮内大輔ニ任ス

十二月大

一日　大神君濱松ニ着御
二日　大神君参州吉田ニ着御主殿助家忠城ニ登テ
大神君ニ謁ス
三日　大神君岡崎ニ着御
五日　大神君岡崎ノ城ヲ出玉フテ京都ニ赴セ玉フ
九日　大神君御入洛

十日　大神君秀吉ニ御對顔北条ヲ亡サン事ヲ相議シ玉フ
十二日　大神君洛ヲ出玉ヒ御帰国ニ赴セ玉フ
十三日　来歳相州御進発ノ事必定セリ諸将兼而軍用
ヲ調ヘシムヘキ旨　大神君酒井宮内太輔家次ニ命シテ参
州ノ諸将ニ是ヲ觸シメ玉フ家次カ使今日京都ヨリ三州ニ着
秀吉来春東征ノ軍役ヲ定テ諸国ニ回文ス
一　五畿内者可為半役事
一　中国并四国者可為四人役事
一　従坂到尾州者可為六人役事
一　北国者可為六人半役事
一　遠三駿甲信此五ケ国者可為七人役事
右軍役之通用意不可有油断来春三月朔日秀吉
令出陣者也仍如件
天正十七年　十二月日
長束大蔵太輔正家ヲシテ粮米ノ事ヲ掌シム
十六日　大神君京都ヨリ御帰国昔三州西尾ノ城ニ着御
此冬　台徳院殿（于時十一歳）秀吉御對顔ノ為御上京有ヘキ
ノ旨也秀吉聞テ幼稚ノ若君遠来ノ御艱難ヲ労テ

書ヲ台徳院殿ノ家臣等ニ遣シテ御上京ヲ止メラル
依之台徳院殿御上京ヲ御延引有テ時 大神君ハ
御在京アリ 台徳院殿ノ臣酒井兵部大夫忠世後雅楽頭ニ改ム
内藤彌三郎後修理亮ト号 青山藤七郎忠成後常陸介播磨守ニ改ム 等ニ
大神君御書ヲ賜テ頻ニ 台徳院殿ニ御入洛ヲ催サル

家忠日記追加巻之十 終

家忠日記追加巻之十一 自天正十八年正月至同年六月

天正十八年庚寅

正月小

三日 台徳院殿駿府ノ城ヲ御首途洛ニ赴セ玉フ井伊
直政酒井忠世内藤正成青山忠成等供奉ス
十三日 台徳院殿御入洛秀吉長束大蔵太輔正家ヲ
シテ旅中ノ労ヲ問ヒ奉ル
十四日 大神君ノ御臺秀吉ノ妹南明院殿ト号ス 聚楽ニ於テ逝

平井文庫

去春秋四十八歳

十五日 台徳院殿御旅服ヲ更ラレ城ニ登リ玉フ酒井忠世御腰物ヲ役ス井伊直政内藤正成青山忠成御傍ニ在リ秀吉大ニ悦ヒ出テ 台徳院殿ニ謁見アリ秀吉侍女ヲ呼テ 台徳院殿ノ御手ヲ引カシメ奥ニ入奉テ秀吉台徳院殿ヲ見テ能ク生長シ玉ヘリ然レ𪜈髻様衣様是田舎様也于時大政所手ツカラ其髻ヲ結ヒ御衣服及ヒ御肩衣ヲ更メ玉フ秀吉金龍ノ大小刀ヲ出テ是ヲ帯セシム即御手ヲ執テ本坐ニ出テ直政ニ謂テ曰

我レ 台徳院殿ノ田舎様ヲ改テ都様トス 家康是ヲ見玉ハ驚キ喜ヒ玉フヘシ 台徳院殿イマタ幼弱ナリ吾是ヲ留ルニ忍ス早ク供奉シテ駿州ニ皈ルヘシ

台徳院殿暇ヲ告テ退出シ玉フ于時秀吉其臣四人ニ各黄金時服ヲ與ラル

十七日 台徳院殿洛ヲ出玉テ御帰国ニ赴セ玉フ

廿一日 大神君北条氏直御征伐トシテ相州小田原ニ御発向アリ来月上旬諸将駿府ニ至テ馳集ルヘキノ旨ヲ嚮催サル

廿五日 台徳院殿洛ヨリ駿府ニ皈リ玉フ

大神君白秀吉 台徳院殿ヲ洛ニ留メサルヿ近日相州ヲ軍

ヲ発スルノ時吾カ領内ノ城ヲ假ラシト欲スルナラン本多作
渡守正信本多作左衛門尉重次ニ命シテ通路ノ諸城ヲ
掃除サセシメ玉フ果シテ　大神君ノ察シ玉フ如リ三日ヲ
経ルノ後秀吉書ヲ以テ城ヲ假ラシト請フ　大神君是ヲ
諾シ玉フ

二月大

二日松平主殿助家忠兵ヲ卒テ三州深溝ノ城ヲ発シテ駿
府ニ赴リ
此月　大神君相州御進発ノ軍令ヲ下シ玉フ

一　三下知ニ先手を者越相見ニ出張ニ為ル事
一　先手を者越今ニ名ニ名といふとも有軍法之上
ニ書子以下悉く可成敗事
一　其字細他之侮ニ相交少年相有之ニ武具馬丸
ニ可成之家之人及其家ニ共以ニ為ル事
但用所ニ有之ニ者ニ可通ニ事
一　人数相時照道ニ至ニ行るよし為ニ堅ニ
ト付ニ猥ニ通ニ可ニ為ニ其人ニ為ル事
一　諸事ニ有リ人ニ指出ニ今遣有ニ為ル事

一 人数押時小旗張炮弓張以弟を定奉行人
至お添可押猥ニ押ニて為出事

一 持穢を軍役ニ非ス百七拂を落意ニ拘ルニ
事ニ依テ止但七拂ニ外令拘ニ主人ニ返ニ
可ニ一本ニ事

一 小荷張押ニ為ニ意ニ不ニ觸但条軍勢ニ不ニ交
拘ニ依テ上ニ付ニ家人ニ軍勢ニ相交ニ成ニ
一 無下ニ為男女不ニ礼取若ニ陳屋ニ依ニ
ニ為ニ者ニ主ニ取ニ自他ニ其者

欠落せは主人ニ知リて没收す付敵地ニ家
世下ニ為ニ先ニ者不可放火事

一 諸商買押買猪藉ニ依テ行ニ近若ニ遠有
ニ候ニ名可ニ成事

一 無下ニ為ニ於ニ陳拂ニ可ニ為出事
右ニ條ニ於ニ遠有ニ日本国中大小神祇茂
照見あ連無用ニ於ニ成ニ也仍如件

正正十八年二月日

吾松平主殿助家忠駿府ニ至リ城ニ登リテ　大神君
謁ス時ニ家忠先陣ノ命ヲ奉テ即日台命ヲ奉テ駿
府ヲ発シ江尻ニ至ル
六日甚雨ニ依テ昔　大神君ノ御進発延引ア
十日　大神君師ヲ師テ駿府ノ城御着遠賀島ノ郷ニ
着御昔家忠由比ニ陣ス
十六日大神君伊奈熊蔵忠政後筑後守ヲ召テ富
士川ニ舟橋ヲ修セシムヘキノ由ヲ命セラル忠政謹
ミ奉テ旨ニヨリ監ス

廿一日富士川ノ舟橋成ル此日北畠信雄駿府ニ至ル
昔　大神君中久保ニ御陣座先驅ヲ進テ沼津近
辺ニ陣ス
廿二日秀吉ヲ郷食シ玉ハンカ為メ　大神君御領国ノ
中ニ先日ヨリ命有テ修セシメ玉フ所ノ茶店各今
日成ルノ上奉行人等ヲ調進ス

三月

一日秀吉ノ先隊京都ヲ発ス五畿南海山陰山
陽北陸兵十七万余騎伊勢尾張二州信雄無

一万余騎甲斐信濃駿河遠江三河五ヶ国
大神君ノ兵二万五千余騎凡東行ノ軍勢二十万余騎
先陣ハ沼津由比蒲原ニ着ト云ヘ其後陣ハイマタ
美濃尾張ノ間ニ充満ス秀吉関東発向ノ前日
参内シテ節刀ヲ賜ル此日秀吉紹巴ヲ招テ東行
ヲ賀スル百韵ノ連歌ヲ興行ス秀吉毛利右馬頭
輝元ヲシテ洛ニ留テ京師ノ警衛トス其兵四万余騎
八日大神君明後十日並山表ニ兵ヲ発セラルヘキノ
旨諸将ニ命セラル

十日秀吉三州吉田ニ至ル八日ヨリ此日ニ至テ雨降ル
十一日秀吉吉田ヲ出ント欲ス　大神君ノ御家人伊奈
熊蔵告テ曰暫リ此地ニ留リ雨ノ晴ルヲ待テ軍
ヲ出シ玉ヘト云フ秀吉ノ曰吾聞ク軍行ニ川前ニ在
テ雨降リ是ヲ渉ラサレハ後必是ヲ渉ル古又ヲ得ス
故ニ吾今ニ川ヲ渉ラント欲ス汝何ニソ吾ヲ止ルヤト
云熊蔵カ云リ川前ニ在テ雨降ル時小軍是ヲ渉
ルハ可也大軍是ヲ渉ラハ兵多ク溺レ死ナント云秀
吉大ニ其言ヲ美ミシテ此ニ留ルヿ二日

十四日秀吉近日駿州ニ入ルノ由其聞ヘアリ依之、
大神君秀吉ノ陣営ヲ吉原ニ終セシメ玉フ松平主
殿助家忠命ヲ奉テ是ヲ監ス
十九日今日秀吉駿府ニ着ント欲ス于時石田治部少輔
三成竊ニ秀吉ニ耳語テ曰リ　大神君ト北条氏直志
ヲ通テ異心アルノ由ヲ告ル依之秀吉暫時猶豫
シテ駿府ノ城ニ入ラス浅野弾正長政此事全ク虚
説ノ旨ヲ強テ諫ム故ニ秀吉疑心頓ニ散シテ駿府
ノ城ニ入ル此日秀吉宇津ノ山ニ至ルノ時此処ノ郷民

勝栗及馬ノ沓ヲ捧テ秀吉東征ノ吉兆ヲ賀ス秀
吉彼レカ志ヲ感テ則着スル処ノ胴服表紙子裏紅梅並
黄金ヲ彼郷民ニ与ル
廿日昨日秀吉駿府ニ着クニ依テ　大神君今日駿
府ノ城ニ渡御秀吉ニ御對顔アリ
廿二日　大神君中久保ニ帰リ玉フ
廿三日秀吉清見寺ニ至ル家忠此処ニシテ秀吉ニ謁ス
廿七日秀吉沼津ノ駅ニ着ツ
是ヨリ先キ北条氏政氏直父子秀吉ノ軍ヲ出ス

ヲ聞テ兵ヲ分テ諸城ヲ守ラシメ已ハ小田原ノ城ニ在
リ是ニ從テ小田原ノ城ヲ御宗守ルノ兵北条新太郎
同姓彦太郎伊勢備中守同姓備後守大和兵部太
輔山角上總介福島加賀入道石巻勘ケ由左エ門
尉南条山城守南条左京大夫南条民部少輔南条
左馬助小西隼人正富永内膳正大藤左衛門佐依田
大膳大夫荒川豊後守大木次甲斐又守清水太郎左衛
門尉遠山左衛門佐大道寺孫九郎安藤備前守同
姓兵部少輔同姓弥兵衛尉相馬次郎上田常陸介芳

賀伊与守同姓伯耆守伊藤右馬助朝倉右京亮内
藤左近大夫大沢式部太輔原豊前守荒木兵衛尉
内藤大和守安中左近将監由良信濃守長尾但馬
守大内宮内少輔佐倉羽田市川長南高井小幡等
都テ其兵四万余騎山中ノ城ハ松田兵衛大夫是ヲ守
ル氏政氏直北条左衛門大夫氏勝間宮豊前守好
高朝倉能登守ヲシテ援ケ守ラシム氏政此三人ヲ
招テ左衛門大夫ニ刀兼氏豊前守ニ刀国吉能登守ニ脇指
ヲ授テ謂テ云リ謀ヲ廻シ軍忠ヲ尽ヽセ好高カ云ク君

心ヲ労スル事ナカレ戦若シ急ニ迫ラハ我必ス戦ヒ死
ナン朝倉能登守退テ人ニ語テ云ク北条家ノ滅亡
其レ必遠カラス山中ノ城ハ要害太タ険也是ヲ守
テ大兵ヲ拒ク可キニ非ス然ルニ氏政旧臣ヲ棄ル也嗚呼悲哉北条家ノ
ヲ守ラシム則是旧臣ヲ棄ル也嗚呼悲哉北条家ノ
亡ヒン事ヲ悔ユ吾必秀吉ノ大兵ト戦テ死ント欲ス
氏政北条美濃守ヲシテ並山ノ城ヲ守ラシム箱根宮
カ崎口ハ松田尾張守憲秀上田上野介朝広ニ安
房上総二州ノ兵ヲ加テ一万三千余騎ヲシテ是ヲ守

ラシム湯本口ハ千葉新介カ軍勢八千余騎ヲ以テ是
ヲ守ル千葉国胤幸去ニシテ其子新介幼弱タルニ因テ家臣源
竹浦口ハ北条陸奥守氏輝皆川山城守広照成田下
総守土生上総介等カ兵一万五千余騎ヲシテ是ヲ守ラシム
廿八日秀吉山中表ヲ巡見セシカ為ニ沼津ヲ発ス此次テ
ニ中久保ノ城ニ至テ軍ノ謀ヲ大神君ト議テ夜ニ入ル
ノ刻ニ及テ沼津ニ帰ル箱根並山ノ地利ヲ尽セシノ
其虚実ノ謀ヲ軍列ノ定ム時漸ク夜半ニ及フ福
原右馬助ヲ召テ謂テ曰明日必山中ノ城ヲ攻討ント欲ス

大神君ノ兵ハ中久保ヲ越テ本山中ニ至リ城ヨリ北ノ高
山ヲ経テ小田原口ニ押向ハシカバ玉フヘシ北畠信雄ノ軍勢
及ヒ蜂須賀阿波守家政福島左衛門大夫正則長
岡越中守忠興蒲生飛騨守氏郷中川藤兵衛尉秀政
丸右近大夫忠政戸田民部少輔等ハ並山ノ城ニ軍ヲ発
テ旦ヲ囲ミ攻ムヘシ近江中納言秀次ヲ大将トシテ中
村式部少輔一氏田中兵部少輔長三堀尾帯刀吉晴
山内對馬守一豊一柳伊豆守直末等其兵五万余騎
山中ノ城ニ兵ヲ発テ旦ヲ攻討ヘシ堀左衛門督秀政
木村常陸介羽五郎左衛門尉長秀長谷川藤五郎等
ハ山中ノ城ノ南方ニ廻テ深谷ヲ隔峻難ノ峯ヲ攀
登ルヘキノ旨福原ヲシテ諸将ニ告シム
廿九日 前夜寅ノ刻ニ及テ山中ノ城ノ寄手先陣既ニ軍
ヲ発ス今日巳ノ刻ニ至テ大将近江中納言秀次山中ノ城
ヨリ十余町ヲ隔テ陣ヲ張ル秀次高峯ニ登リ城中ヲ
臨見テ中村式部少輔一氏ヲ招テ云ク我カ陣敵城遠
シ近リ陣ヲ攻寄セント欲スト雖モ地利ノ要害ヲ
見セシムヘキノ由ヲ下知ス一氏其旨ヲ奉ケ従士渡辺

勘兵衛ヲシテ仆候ニ赴カシムヲ時渡辺謂テ云ク附
城ノ要害堅固ナラス攻テ即時ニ抜ヘキニアラス帰来
テ告ルニ及フヘカラス吾則味方ノ陣ヲ招リヘシ然ラハ速ニ
軍ヲ発シテ城ヲ攻撃ヤタシムヘシト其約ヲ定テ渡辺城
近リ寄テ是ヲ伺フニ遠リ見シニ替ラテ附城ノ要カ
イ堅固ナラス干時渡辺約ノ如リ後軍ヲ招リ一氏連
ニ兵ヲ進ムル支八町余渡辺亦使ヲ馳テ急ニ城ヲ攻討
ン支ヲ告ル一氏是ヲ許サス制止スルトニヘトモ渡辺聴
カス進テ城ニ攻入ル一氏カ軍士数内匠助是ニ次テ城
ニ入ル成合半左衛門尉高屋助八郎坂井兵右衛門尉吉田
武左衛門尉等共ニ進ム一柳伊豆守直末先登ニ進テ
奮戦テ遂ニ死ス附城ノ守将間宮豊前守好高士
卒ヲ指揮シテ矢ヲ発シ鉄砲ヲ飛シテ是ヲ拒ク青木
新兵衛尉猶城ニ當ル右ノ谷ヨリ搦手ニ廻テ善戦シテ
首級ヲ得タリ青木是ヲ本陳ニ持来テ秀吉ノ實
検ニ入ル是今日ノ最初ノ首也事始吉シト悦テ秀吉
金銭ノ賞首ヲ取テ青木ニ授ケ間宮好高カラ尽シ
テ拒キ戦フトニヘ氏寄手ノ多勢競ヒ攻ルノ間好高

ニ加リ府城ヲ守ル東国ノ集リ勢拒ク支ヲ得ス皆
離散ス好高猶拒キ戦テ遂ニ自殺ス其子阿宮武部
少輔阿宮源十郎父子三人ヲ始テ従兵百余人皆戦死
ス中村カ兵利ニ乗シテ進テ三ノ丸ヲ破ル北条氏政山
中ノ城ノ軍ヲ聞テ其雄ヲ阿ニカ為山上強右エ門
尉ヲ仆候トシテ山中ノ城ニ遣ハシ山上小田原ヲ発テ山
中ニ赴ク大神君ノ兵本山中ニ進テ樵夫ノ通路ヲ発
ス其道狭シテ僅ニ一騎並行ク其軍勢連続テ
行程長途ニシテ木ノ間隠レニ夥敷ニ亦南ノ方日金ニ

當テ長谷川藤五郎木村常陸介堀右衛門督カ軍勢山
中ニ充満ス山上遠ク是ヲ見テ敵ノ多勢必今夜進ス
田原ニ攻来ルヘシ山中ノ城ノ安否聞ニ不及速ニ皈テ是
ヲ告シト欲テ小田原ニ返ス于時山中ノ城寄手ノ大将
秀次仙崎ノ辺ニシテ笛ニ是ヲ見テ敵既ニ城ヲ棄
テ小田原ニ出奔ス速ニ城中ニ攻入リ退キ後レタル残
黨等ヲ一人モ洩サス討捕ルヘシト士卒ヲ指揮シテ
勇ヲ励ス坊辛一同ニ鬨ノ発シ伍ヲ乱シテ城中ニ攻
入ル城兵拒ク支アタハス或ハ戦死ニ或ハ自殺ス僅

ニ免ル者ノ少シ此日午ノ刻ニ山中ノ城遂ニ陥ル城兵戦
死スル輩杉田右兵衛大夫池田民部少輔推津隼人正
佐藤左衛門尉東本備前守山本兵庫頭同姓源次郎
山岡左京大夫片山大膳大夫富田豊後守川尻民部少
輔ヲ始五百余人皆死ス城将北条左衛門大夫氏勝士
卒ト共ニ戦死セント本城ニ迫テ暫ク時ヲ移ス寄手
ノ雑兵等城中ノ倉庫ニ入テ財宝ヲ奪ヒ争フ走ル
ヲ制スルノ間ニ氏勝僅ニ城ヲ免レ深山ニ隠ル日已ニ
暮テ先途ニ迷ニ氏勝進退ヲ失テ自殺セント欲ス

其弟北条新八郎及ヒ木村三河守堀内日向守是ヲ制
シ止ム氏勝山中ノ城ノ要害ニ在テ敵ヲ拒ク事アタ
ハスシテ城ヲ抜レ従士皆命ヲ殞ス将猶城ヲ免レ出
テ何ノ面目有テ小田原ノ城ニ再ヒ帰リ入ントヤ是ヲ恥テ
氏勝ヲ始テ一族従士十八人皆髪ヲ薙テ再縄城ニ
入テ蟄居ス小田原ノ城ハ北条五代連續シテ多年
修スル所ノ要害堅固也殊ニ東海道第一ノ箱
根山ノ嶮難ヲ前ニ當テ東国ノ群士競ヒ集テ是
ヲ禦キ守ルヲトヒ秀吉百万ノ兵ヲ以テ是攻討ト

云フ尾容易ク城ヲ拔カンヿ難シト氏政氏直荒
言ヲ吐ク然ル処ニ山中ノ城陥ルノ由其告ケ有ニ
因テ小田原ノ城中大ヒニ恐ル

四月小

一日　大神君ノ兵松平因防守康重佐埜口ヨリ
進テ宮城野ニ登リ北条カ兵ヲ攻討首ヲ斬ルヿ
八十余級依之宮城野湯本竹カ浦三ケ所ヲ守ル
北条カ軍士等皆狼狽シテ小田原ニ逃ケ入ル
二日　大神君久世三四郎坂部三十郎ヲ以テ箱根
山ノ斥候トシテ進テ箱根ニ陣シ玉ヿ依之秀次及
ヒ上方ノ諸将等各箱根近辺ニ陣ヲ張ル此日
大神君蔵ケ原ニ於テ戸田三郎右衛門尉忠次
ヲ召テ御腰ニサシ玉ヿ御再拝ヲ以テ忠次ニ賜
ル忠次今日殿ヲ奉ルニ依テ此再拝ヲ以テ士卒
ヲ指揮エヘキノ旨釣命ヲ蒙ル
三日　大神君ノ兵小田原ニ至テ箱根山ノ麓ニ陣ス
北条家ノ旧臣松田尾張守憲秀カ嫡子笠原新
八郎笠原カ養子トナル故ニ姓ヲ改ムト云者アリ先年伊豆国戸倉

ノ城ニ在テ北条ヲ敬テ志ヲ武田勝頼ニ通ジ倉
ノ城ニ甲州ノ兵ヲヒキ入ル小田原ノ城ヲ謀ラントス
不日ニ勝頼甲州ヨリ来テ自殺ス依之笠原亦志ヲ
変シテ己カ城ニヒキ入レシ甲州ノ兵ヲ殺シテ降
ヲモテ再ヒ北条ニ属セントス然リト云ヘ
原ヲ小田原ノ城ニ招テ既ニ誅伐セントス然リト云ヘ
氏彼レカ元祖松田左衛門尉ヨリ以来代々北条家
ノ恩旨也其功ニ因テ死罪ヲ赦ス笠原髪ヲ薙テ
小田原ヲ去リ又尾張守憲秀カ領地河村ノ郷ニ
閑居ス此度秀吉軍ヲ小田原ニ発カルト聞テ笠原
窃ニ志ヲ通ジ東国ノ郷導ヲ秀吉ニ請フ秀
吉悦テ是ヲ許ス笠原父尾張守憲秀ニ此隠
謀ヲ語ル憲秀是ヲ諾シテ志ヲ秀吉ニ通ス氏
政氏直憲秀カ敬属ヲ知ラス
是ヨリ先氏政氏直憲秀及ヒ家臣等ヲ招テ
軍ノ謀ヲ議ス氏直謂テ曰ク敵ノ先陣既ニ箱
根山ヲ越テ小田原ノ城近ク進ム我兵ヲシテ畑石
橋辺ニ赴カシメ敵険難ノ地ヲ越ヘ来ル撃ニ

乗シテ急ニ是ト戦テ一戦ノ中ニ雌雄ヲ爭ヒ當
家ノ安否ヲ定ント謀ル下時松田憲秀カ云ク敵
山中ノ城ヲ拔テ其勢太タ盛ニシテ勇ニ進ム味方
ノ兵ハ山中ノ城ノ没落ヲ聞テ大ヒニ恐テ勇カヲ失
フ然ルニ今吾カ弱兵ヲ以テ強敵ニ向ヒ戦ハンヿ是
敗ヲ招クニ似タリ先年長尾景虎武田信玄兵ヲ
小田原ニ発スルノ時亡君大聖院殿謀ヲ廻シ城ヨリ
敢テ軍ヲ出サス要害ヲ修メ堅ク拒キ守ル依之
敵ノ兵數日ノ在陣ニ糧尽キ氣屈シテ軍ヲ退

キ帰ラント欲ス于時城中ヨリ兵ヲ発テ是ヲ追ヒ
討ツ敵狼狽シ離散ス味方ノ兵大ヒニ利ヲ得タリ
隣国ノ敵タニモ斯ノ如シ況ヤ是ハ西国中国ノ兵
長途ノ陣ニ頓テ粮尽キ疲労シ勇力衰ヘンヿ
掌ヲサスカ如シ其時ヲ伺ヒ謀テ弊ニ乗テ敵ヲ
討ンヿ石ヲ以テ卵ニ投カ如クナラント其計略言ヲ
尽ス北条父子是ヲ可也トス旧臣等モ亦皆此
謀ニ従フ
八日夜ニ入皆川山城守廣照竊ニ小田原ノ城ヲ

出テ大神君ヲ憑テ降ル
九日大神君ノ兵小田原ノ城ヲ圍ム于時城中ヨリ
矢ヲ発シ火炮ヲ飛シテ是ヲ拒ク安部左馬助
忠吉進テ鉄炮ニ中リ疵ヲ被ル松田尾張守憲秀
竊ニ使ヲ秀吉ノ陣ニ遣シテ謂テ曰小田原ノ城西南
ノ間ニ當テ笠掛山ト云有リ是嶮難ノ地究竟ノ
要害ナリ此山ヨリ小田原ノ城中直下ニ見ヘ城ヨリ
拒クニタヨリナク攻テ謀アルノ地利也箱根山ノ此
方ニ樵夫ノ通フ道アリ竊ニ是ヨリ軍勢ヲシテ此

山ニ登ラシメ爰ヲ以テ本陣ト定ラルヘシ其後時節
ヲ伺ヒ委細ニ内通スヘキノ旨ヲ達ス秀吉大ニ悦
テ使者ヲ賞シテ禄ヲ与ヘ今度當城落去ノ変一
偏ニ松田カ謀ニ因ル猶内應跡カ成ルヘカラサルノ
旨ヲ返答シテ秀吉頓テ斥候ヲ彼山ニ遣シテ其
地利ヲ見セシム此山松田カ云フニ違ハス秀吉暫ク
湯本ノ真覚寺ニ屯シ軍勢ヲシテ笠掛山ニ登ラシ
メ松柏生ヒ茂レル間ニ陣営ヲ修シ櫓ヲ高シ白紙
ヲ以テ城壁ヲ包ムノ間小田原ノ城中ヨリ遠ク見レ

八白壁ニ違ハス既ニ営成テ後此陳営ヲ覆フ松栢
ヲ悉ク伐ラシム依之小田原ノ城ト笠掛山トノ間明
カニ見エル城中ノ兵是ヲ見大ニ驚キ一夜ノ中ニ陳営
ヲ終ニ石壁ヲ築リテ最モ奇ナリト謂ツヘシ秀
吉ハ天魔ノ化現ナルヘシト城兵皆恐懼ス
秀吉　大神君ヲ笠掛山ノ陳営ニ招請シテ共ニ高ニ
登テ　大神君ニ語テ云ク敵吾カ目下ニ在リ小田原
ノ城ノ亡滅ロ今ニアリ吾レ必関東八州ヲ以テ
大神君ニ進ラセント約ス

前田利家其子利長師ヲ加州ヲ発シ木曽路ヲ
経テ東国ニ至ル上杉景勝毛利河内守等同ク軍
ヲ発ス其兵三万五千余騎上州松枝ノ城ヲ圍テ攻
討シト欲ス城主大道寺駿河守政繁其子新次郎城
在リト云ヘ氏北国ノ多勢ヲ見テ敢テ出テス城ヲ固メ
拒キ守ル
十日利家景勝急ニ松枝ノ城ヲ攻ム大道寺父子拒
ク支ヘ得ス降ヲ利家ニ乞テ城ヲ避渡シ利家先
駈ノ兵ニ加ル駿河守政繁カ四代ノ祖ハ江州ノ人ナリ

北条早雲ト共ニ関東ニ下テ其功ヲ成シ小田原ノ城ヲ草創スル七人ノ其獨也故ニ今ヲ以テ北条家ノ三職ニ列ス然ニ政繁利家景勝等カ多勢ニ恐テ城ヲ避渡シ剰ヘ利家カ先陣ノ兵ニ加リ東国數城ノ郷導トナル

十一日利家兵ヲ発テ松山ノ城ヲ囲ム是上田上野介カ居城タリト云ヘ氏止田ハ小田原ノ城ニ在テ其臣難波田因幡守木呂子丹波守金子紀伊守山田伊賀守若林和泉守等ヲ城ニ留テ守ラシム利家景勝松枝ノ降人等ヲ以テ案内者トシテ既ニ明日攻テ城ヲ拔カント欲ス松山ノ城兵等カ尽キ降ヲ利家ニ乞テ城ヲ避ケ渡ス利家是ヲ許ス城兵三千余騎利家カ先隊ニ加ル既ニ寄手ノ軍勢數萬騎ヲ以テ小田原ノ城ヲ囲ムト云ヘ氏東国ノ多勢城ニ在テ是ヲ守リ拒クノ間城容易ク陥ラス于時 大神君ト信雄志ヲ一ニシテ城ニ内通アルノ由巷説區ニニシテ陣中群疑起テ静ナラス

十五日秀吉陣中ノ浮説ヲ聞テ僅ニ侍童五六人

ヲ卒テ　大神君及ヒ信雄ノ両営ニ入テ各半日ニシ
テ彼二亭ニ於テ終日ヲ暮ス是ヨリ諸臣疑ヲ散テ
静ナリ
十九日利家景勝兵ヲ卒テ北条安房守氏邦弟氏政力
居城鉢形ノ城ヲ圍ム沼田ノ城主猪股能登守此
城ニ来リ守ル猪股寄手ノ多勢ヲ見テ其勝ベカ
ラサル事ヲ慮テ困窮ニ迫リ降ヲ乞ハヽ其勇力
衰ルニ似テ後難猶恥アリイマタ軍ヲ締ハス互ノ
勇氣勝劣ナキ以前ニ所詮降ヲ乞テ利家ニ属

セント欲テ松山ノ城ノ降人難波田木呂子等ヲシ
テ此旨ヲ利家ニ達ス利家是ヲ許ス猪股降ヲ
乞テ城ヲ去ルニ因テ鉢形ノ城兵等猶豫ノ心起
テ城中和セス故ニ氏邦城ヲ守ル事ヲ得ス城下ハ
青龍寺ニ入テ剃髪染衣ノ形ト成テ遂ニ鉢形ノ
城ヲ開渡ス箕輪厩橋河越ノ三城皆利家ニ
降テ城ヲ避渡ス豆州下田ノ城ハ清水上野介
是ヲ守ルト云ヘ氏東国ノ数城皆利家ニ降ルヲ
聞テ清水忽ニ勇力尽テ城ヲ棄テ逐電ス

廿一日北条右衛門大夫氏勝深衣ヲ姿ト成テ
大神君ノ御陣営ニ参候ニ、大神君ニ伺奉ニテ秀
吉ノ営ニ至テ則秀吉ニ謁ス
山中ノ城没落ニテ後氏勝僅ニ免レ相州井縄城
ニ在リテ時氏政氏直栗田ノ某ヲ使トシテ謂テ
曰山中ノ城陥ルヿ是全ク氏勝カ武勇ノ足ラ
ルニ非ス北条家ノ武運頽リニ因テ也氏勝面
ヒ小田原ノ城ニ帰入テ敵ヲ拒テ軍忠ヲ励スヘ
キノ旨ヲ説カシム然リト云ヘ氏勝山中ノ城

ヲ敵ニ授カレ城ヲ棄テ去ルヿヲ恥テ井縄城
ニ留テ戦死ヲ遂ケ初ノ恥ヲ雪ント欲テ氏政カ
旨ニ應セス栗田小田原ノ城ニ帰テ謂テ曰氏勝
志ヲ秀吉ニ通ス依之使ノ旨ニ従カヘサルノ由ヲ
説ス是ヨリ氏政氏直父子氏勝ヲ疑ノ心屡
起ル故氏勝恨憤テ猶此城ニシテ忠死ヲ遂ン
死後ニ忠義ヲ顕サント決ス氏勝ハ連年
大神君知リ玉ノ故有ニ因テ都筑弥左衛門尉
松下三郎右衛門尉ヲ御使トシテ命有テ白北条

カ領国関東ノ数城皆秀吉ニ降テ城ヲ避渡
スト今既ニ小田原一城ニ迫ルニ亦此城ノ落去日ヲ
経ヘカラス城イマダ陥ラサルノ以前ニ汝速ニ吾
陳ニ来テ秀吉ニ降テ我レ秀吉ニ請テ足下
カ命ヲ救サンニ使此両旨ヲ氏勝ニ説ク氏勝忠
死ヲ決シテ命ニ従カ公　大神君重テ本多忠勝
榊原康政井伊直政等ヲシテ耳縄ノ城ニ赴カシメ
玉テ其命ニ度ニ及ヒ氏勝遂ニ即旨ニ従ヒ耳縄
ノ城ヲ避渡ス

廿二日関東ノ諸城皆両味方ニ属テ避渡ス依之
大神君其検使トシテ江戸田三郎右衛門尉忠次ヲ
シテ江戸ノ城ニ赴カシメ玉フ是ヨリ先キ　大神君
遠山井波守真田隠岐守ニ江戸ノ城ヲ譲ラント
シ命セラルニ二人両旨ニ従テ忠義ヲ励サント欲ス
廿六日　大神君ノ臣本多中務太輔忠勝其子本多
平八郎忠政鳥井彦右衛門尉元忠平岩主計頭親
吉植村土佐守家忠秀吉ノ臣浅野弾正長政其子
浅野左京大夫幸長木村常陸介等一万余騎ノ兵

ヲ卒テ武州岩附ノ城ニ赴リ野州佐野ノ城ハ北条
氏忠カ居城ナリ氏忠ハ小田原ニ在テ家臣等ヲ
シテ佐野ノ城ヲ守ラシム夫レ佐野ノ城ハ其初佐
野修理亮宗綱カ城ナリ宗綱カ領内彦間ト云城
アリ上州舘林ノ城主長尾照長頃年攻テ此城ヲ拔
ント伺フ天正十二年臘月晦日砲ニ入リ照長兵ニ
不意ニ発シ攻テ彦間ノ城ヲ取ル宗綱元来血氣
ノ勇者タルニ依テ是ヲ聞テ大ニ怒リ翌天正十三
年ノ朔旦佐野ノ城ヲ発テ彦間ニ赴ク宗綱従兵

ヲ卒セス僅ニ舎人栗田ノ某一人ヲ携ヘ彦間ノ城ニ
馳向フ照長カ兵士等櫓ニ登テ矢ヲ発シ炮ヲ飛ス
其矢宗綱カ左ノ腋ニ中テ忽ニ馬ヨリ落ツ舎人ノ
栗田是ヲ助ケテ漸ク城ヨリ二町余ヲ去ル城矢
木戸ヲ開テ進テ出是ヲ追討テ遂ニ宗綱カ首ニ
ヲ得タリ宗綱嗣子ナキニ因テ佐野ノ家既ニ絶
ントス依之佐野ノ旧臣大貫越中守竹沢源三郎
津布久駿河守山上美濃守飯塚兵部少輔高瀬
紀伊守小見小四郎赤見等相議シテ曰當時関東

八州ニテ北条家ノ武威強大也彼一族ノ請テ宗
綱ノサシズニテ昌ニ嫁シテ佐野ノ後嗣ト成サシムヘ
シト衆議一決シテ旧臣谷佐野家ニ対シテ末代ニ及
テ野心ナク忠功ヲ尽スヘキノ旨連署ノ起請文
ヲ為シテ皆昌ニ同意ス然ル処ニ宗綱カ父小太郎
昌綱カ弟天徳寺ノ住僧タリ並テ志ヲ佐竹ニ通シ
シ旧臣等カ旨ニ従カス佐竹カ氏族ヲ以テ佐野ノ
遺跡ヲ継カシメント強テ諫諍スルトニ臣等敢
テ昌ヲ聴カス遂ニ北条氏政カ叔母氏忠ヲ請テ
佐野ノ家ヲ継カシム天徳寺昌ヲ怨テ寺ヲ棄テ落
ニ走リ黒谷ニ山居ス今度秀吉京都ヲ発スルノ時
彼僧黒谷ヨリ騎ニ出ニ昌ヲ推カテ東国ノ案内
者トス秀吉彼僧ヲシテ小田原ヨリ佐野遣ス佐
野ノ家臣等ヲ諜ラシム臣等昌ヲ諾テ天徳寺ニ
従フ大貫越中守獨昌ニ従ハス夫勇士ノ通義
ヲ守リ二心ナキヲ以テ本意トス其初天徳寺ノ殿
ヲ氏忠ニ属シ其臣ト成テ城ヲ守ル今ヲ亦志ヲ変
シテ天徳寺ニ属セハ一生両意決スルヿナカラント謂

テ敢テ是ニ從ハス佐野ノ本城ヲ堅ク守テ忠死ヲ
遂ケント欲ス依之其余ノ臣等天德寺ヲ首將ト
シテ大貫ヲ攻討ツ大貫戰フニ及ハス命ハ義ニ因テ軽
シト大ニ呼テ遂ニ自殺ス佐野ノ家臣等天德寺ヲ
仰テ佐野ノ城主トス依之佐野ノ城秀吉ニ属ス

五月大

上野国西牧ノ城ハ多目周防守大谷帶刀左衛門尉
是ヲ守ル松平修理大夫本名芦田兵ヲ発シ攻テ西牧ノ城
ヲ拔キ城將多目大谷ヲ始城兵悉ク討捕リ進
テ同国石倉ノ城ヲ攻ント欲ス城將降ヲ乞テ石倉
ノ城ヲ避渡ス修理大夫城ヲ請取リ石倉ニ来會
ス石倉謀テ修理大夫ヲ刺殺ス修理大夫カ弟松
平新六郎亦石倉ヲ殺ス石倉カ從兵等新六
郎ヲ競ヒ攻ム新六郎勇ヲ震ヒ術ヲ尽テ苦ヘ
戰シ悉ク是ヲ討捕ル新六郎イマタ若年ニシテ
拔群ノ武勇ヲ震フ　大神君大ニ是ヲ美稱有テ
則修理大夫カ遺跡ヲ以テ新六郎ニ賜ル于時
大神君御書ヲ新六郎ニ下サル

後理ニ史跡職ニ[illegible]ニ[illegible]
[illegible]人[illegible]不[illegible]
元陳[illegible]
廻[illegible]也

[illegible]十一日　家康

[illegible]

十五日　大神君ノ兵進テ小田原ノ城壁中ノ築地ニ陳ヲ移
十八日下総国臼井ノ城降ル（原式部太輔是ニ居ル）　大神君酒井
宮内太輔家次ヲシテ是ヲ得セシメ玉ヲ

十九日寄手ノ軍勢岩付ノ城ヲ囲ム此城ハ太田十郎
氏房（氏政カ二男）カ城ナリ氏房ハ小田原ノ城ニ在テ其臣
伊達上ナ兵衛尉ヲシテ本城ヲ守ラシメ妹尾下総
守片岡源太左衛門尉ヲシテ二ノ丸ヲ守ラシム本多
中務太輔忠勝浅野彈正長政大手ノ部将タリ鳥
井彦右衛門尉元忠平岩主計頭親吉搦手ノ部
将トシテ新部ニ向ヒ囲ム木村常陸介梶原ノ某等
加リ和氣向フ城兵進テ郭外ニ出張シ手拒キ戦フ
寄手ノ軍勢急ニ攻討城兵狼狽シ城ニ敗シ入ルト

欲ス利ニ乗テ是ヲ追フト太タ急也城兵大手ノ
門ニ於テ返シ合テ苦戦ス此ニ於テ寄手ノ兵命
ヲ殞シ疵ヲ被ル者多シ浅野彈正長政火ヲ城中
ニ放テ攻ルト云ヒ城陥ラス其子浅野左京大夫幸
長大手ノ門ノ橋上ニ進テ奮戦フ鳥井彦右衛門尉
元忠隠居曲輪ニ攻入リ本城ヲ破ント進ム時ニ城兵
夥シク拒ク是ニ依テ元忠カ従士寺田喜兵衛尉
小田切又三郎一宮左太夫等三十三人戦死ス亦疵
ヲ被ル者七十四人本多中務太輔大手ノ門ヲ破ル其

子本多平八郎忠政（于時十六歳後ニ美濃守ト号ス）戈ヲ拉テ奮戦ヒ城
将妹尾下総守ヲ斬テ其首ヲ得タリ于時敵ノ矢
忠政カ鞍ノ前輪ニ中ル三浦監物ハ忠政ト共ニ進テ
戦死ス植村土佐守恭忠内藤源太左衛門尉永田
角右衛門尉戦功ヲ尽ス鳥居元忠平岩親吉本多
忠政各一所ニ集リ進テ士卒ヲ指揮シテ勇ヲ励ス
本多忠勝カ兵三宅理兵衛尉鈴木九左衛門尉（各旗頭）
忠勝カ旗ヲ本城ニ拋入ル梶金平ハ槍ヲ合セタ多
門傳十郎山口加平次等能ク戦テ軍功アリ河合

又五郎蜂須賀金右衛門尉ハ疵ヲ被ル下里藤八
郎佐原作右衛門尉江原市内長阪甚平小野田新
五郎等戰死ス城将妹尾ハ忠政ニ討レ片岡ハ疵ヲ
負フ其余ノ城兵或ハ命ヲ殞シ或ハ疵ヲ被リ残ル者
少シ寄手弥勝ニ乗テハ競ヒ攻ム
廿日岩附ノ城兵力尽テ拒クヿヲ得ス伊達与兵衛
尉降ヲ乞フ本多忠勝浅野長政等議デ是ヲ許
ス忠勝長政城ヲ請取リ使ヲ小田原ニ発テ此由ヲ
大神君及ヒ秀吉ニ告ル　大神君其功ヲ美称シ玉フ

亦秀吉其勇敢ヲ褒メ忠勝長政カ両使ニ尉ヲ付
ノ刀脇指ヲ與ル
廿四日結城小田原ニ来テ秀吉ニ謁見ス伊達正宗奥
州ヲ発シ越後ヲ過キ甲州ヲ経テ小田原ニ来リ秀吉
ニ謁セント請フ正宗（于時廿四歳）髪ヲ禿ニシテ異體也
秀吉ノ云我レ大兵ヲ卒テ北条ヲ攻ム依之上杉
景勝佐竹義重聘使ヲ馳ス汝獨然ラス其侵シ
取ル所ノ會津仙道ヲ速ニ返スヘシ但シ米沢三
十万石ハ元ノ如ク領スヘシ若シ此旨ヲ背カハ早

ク帰リ去レ汝カ會津ニ至ラン比必北条ヲ滅シ畢
テ軍ヲ會津ニ発セン正宗答テ曰死生タモ是命
ヲ聴カン況ヤ郡邑ノ古又其旨ニ従テ會津仙道是
ヲ返スヘシト謂テ暇ヲ告テ即小田原ヲ去ル

六月小

五日夜ニ入大雨小田原ノ城中和田三浦カ従兵百五十丈
役所ヲ自焼シテ城ヲ出奔ス
忍ノ城ハ成田下総守カ居城也成田ハ小田原ニ在テ酒
巻靱負助ヲシテ忍ノ城ヲ守ラシム石田治部少輔三成

討手ノ首将トシテ佐竹宇津宮カ兵ヲ加テ忍ノ城ヲ
囲テ攻討ト云ヒ酒巻能ク拒キ守テ城陥ラス浅
野弾正長政岩附ノ城ヲ抜テ後秀吉ノ旨ヲ受テ
忍ノ城ノ寄手ニ加リ石田ト共ニ城ヲ囲ム城内應ノ者
在テ志ヲ長政ニ通ス長政是ヲ石田ト議ス石田聞テ
此事成ラハ長政カ軍功ナランヿヲ妬テ長政ヲ謀ラ
ント欲ス長政内應ノ者ト約ヲ定テ軍ヲ発テ城ヲ
攻メ行田口ヲ破テ進ム石田佐竹宇都宮収テ兵
ヲ出サス依之長政一旦行田口ヲ破ルト云ヘ𪜈後

次ノ兵ナキニ因テ城ヲ拔ク支ヲ得ス軍ヲ本陣
ニ退リ長政カ從卒死傷ノ者百余人ヲ及フ
秀吉右筆山中山城守ト云者アリ連年成田下総
守ト好交ノ友ナリ秀吉山中ヲ招テ汝成田ヲ相知
ルヿ尚シ試ニ一輪ヲ遣シ彼ヲシテ我ニ降ラシムヘシ山
中即書ヲ成田カ許ニ遣ス成田是ヲ諾ス山中成
田カ回章ヲ持テ秀吉ニ示ス秀吉大ニ悦テ成田
カ書ヲ竊ニ氏直ニ遣テ謂テ曰関東八州ノ數城
皆志ヲ我ニ通ス小田原ノ城遂ニ破ラルヿ近シ氏

直速ニ我カ軍門ニ降ラハ其命ヲ赦サニ氏直是ヲ
聞テ後城中ノ諸士ヲ疑フ事屢起ル氏政氏直使
ヲシテ成田ヲ招ク成田病ト称シテ遅参ス使三度
ニ及フト云ヒ来ラス氏政氏直亦醫師田村安栖ヲ
遣テ云ク汝野心アルノ支我レ是ヲ聞ク其實否
ヲ知ランカ為再三招ト云ヒ来ラス故ニ其疑猶
止ス成田答テ曰敵ノ大兵忍ノ城ヲ囲ム我レ城
中ノ士女ヲ悉ク殺スニ忍ヒス故ニ山中山城守ニ因
テ降ヲ秀吉ニ乞フ其支聊モ偽ニ非スト云フ氏

政氏直大ニ怒テ成田カ役所ノ四方ニ柵ヲ結テ山
上強右衛門尉ヲシテ兵八千余人ヲ加テ是ヲ守ラシム
十四日松田尾張守憲秀隠謀同意ノ一族従者等
ヲ竊ニ招テ謂テ曰北条家滅亡ノ期迫ル関
左八州ノ諸城皆降ヲ乞テ秀吉ニ属ス今僅ニ残ル
所ハ小田原ノ城也當城ノ落去亦日ヲ経ヘカラス我
是ヲ慮ルニ依テ堀左衛門督ニ因テ降ヲ秀吉ニ
乞フ秀吉是ヲ許テ剰ヘ伊豆相模ノ二州ヲ以テ
我ニ与ヘント約ス即明十五日ノ夜ニ入長岡忠興池

田輝政堀秀政カ兵ヲ我カ守ル役所ヨリ城中ニ引入シ
ト決ス各其用意アルヘキノ旨ヲ説ク憲秀カ嫡子
笠原新六郎三男松田弾三郎内藤左近大夫（憲秀カ智）
松田肥後守等皆是ニ諾ス憲秀カ次男松田左
馬助ハ其容貌美麗ニシテ心優ニ艶也依之氏
直寵愛浅カラスシテ常ニ傍ヲ離レス左馬介
此旨ヲ聞テ流涙シテ曰悲哉父ノ此心アル事
父ハ是北条家累代ノ長臣トシテ威ル州ニ蓋
ニ富東海ニ溢ル依之一族皆其沢ヲ蒙ル假令

大ナル恨アリト云氏今此時ニ至テ二心アランハ義ニ
非スト諫言ヲ尽ス憲秀聞テ大ニ怒テ曰此隠
謀ヲ企ルヿ我レ既ニ齢傾キ栄花ノ日ナシ是全
ク身ノ為ニ非ス子孫ノ後栄ヲ思フ故也然ルニ
汝其志ヲ破ル是不孝ノ至也左馬介此形勢ヲ見
テ一旦宥テ日ヲ過サンカ為メ偽テ憲秀カ旨ニ
従フ憲秀大ニ悦フテ時左馬助謂テ曰明十五日
ハ不成就日ト謂テ其功成リ難キノ日ナリ明後
十六日ニ至ルマテ延引有テ宜シカルヘキノ旨ヲ諫

ム憲秀是ニ諾ス其夜左馬介身ヲ鎧櫃ニ入替
テ竊ニ本城ニ往テ氏直ニ謂テ曰我カ父憲秀
カ命ヲ賜ルニ於テハ一大事アリ是ヲ告ルヘシ
氏直堅ク其約ヲ定ムテ時左馬介涙ヲ垂テ
父憲秀カ叛逆アルヿヲ告ル氏直大ニ驚テ翌
朝憲秀ヲ召テ北条陸奥守氏輝板部岡江
雪斎ヲ以テ憲秀カ隠謀ヲ敵ヨリ告ル者アリ
其信否ヲ糺明スヘシト云ヽ憲秀聞テ是敵
謀テ君ヲ誑ノ言ナラント陳ス氏輝江雪カ曰

足下ノ子左馬助ヲシテ告ル敵ノ誑詐ニ非スト云
フ此ニ於テ憲秀陳スル処ナシ依テ憲秀ヲ禁
獄シ彼カ役所ニ軍士ヲ入替堅ク是ヲ警衛ス
十五日池田輝政長岡忠興堀秀政等憲秀カ
約スル時刻ニ至テ兵ヲ発シ彼レカ役所ヨリ城中
ニ攻入ラント欲シ兼テ定ムル旗ノ紋相印ヲ走リ
約ニ違フ憲秀カ謀露顕シテ役所ニ軍士ヲ
入レ替ヲ是ヲ守ラシムルト窃シテ池田堀長岡等城
ヲ攻スシテ兵ヲ収ム

廿二日井伊兵部少輔直政松平周防守康親小田原
城篠曲輪ニ攻入ル兼日ヨリ金堀シシテ此曲輪
ヲ郭外ヨリ穿サシム漸ク城中ニ堀入ル此夜甚
雨烈風ス城中ニ堀入ル所忽崩テ要害ノ城壁
倒ル城中ノ兵周章ス直政康親士卒ヲ指揮
シテ云ク城中ニ返忠ノ者アリ此利ニ乗テ攻テ
城ヲ陥ントテ進テ乱ヲ発ス城中ニ攻入リ火ヲ敵
営ニ放テ旗ヲ篠曲輪ニ建ル城兵諸方ノ持
口ノ柵ヲ一所ニ集リ拒キ戦フ直政康親城ニ

攻入ルト云ヒ後援ノ兵ナキニ依テ城中ヨリ軍ヲ
返ス迫藤登之助千時十七歳城中ニ攻入ルノ時城兵
小屋甚内ヲ討テ其首ヲ得タリ向坂傳蔵共
ニ進テ首級ヲ得ル小林勝之助城兵小幡カ士
ト槍ヲ合セ疵ヲ被ル千時小林槍ヲ突折ル味
方ノ兵城中ヨリ軍ヲ退クノ時小林勇ヲ震テ殿
ス其夜風雨甚シテ殊ニ闇夜也直政原親吾
ニ牒シ合セス不意ニ起テ城中ニ攻入リ火ヲ放テ
凱ヲ発ス味方ノ軍勢驚キ騒テ城中ヨリ軍

ヲ発テ寄ノ手ノ陣ヲ襲ヒ討ノ由虚説有テ陣
中狼狽シテ伍ヲ乱ス千時松平主殿助家忠獨
其陣乱レス静也依テ家忠能ク群動ノ不細ヲ
聞ク敵城篠曲輪ニ當テ凱聞ヘテ放火ノ先ア
リ家忠従士ヲシテ堅ク吾陣ヲ守ラシメ
大神君ノ御陣営ニ馳参テ言テ曰今夜ノ物忽
必ス敵ノ夜討ニ非ス篠曲輪ノ中ニ凱聞ヘ焚
ノ光見ユ城ニ内應ノ者有テ約束ノ燧ヲ挙ルカ
又味方ノ兵今夜風雨ノ時ニ乗テ城中ニ攻入ルト

云氏味方ノ後援ナキニ依テ城外ニ是ヲ告ケ知セ
ニカ為凱ヲ発シ火ヲ放ツカ是二事ヨリ他ナキ
ノ旨ヲ達ス依之陣中ノ騒動鎮也　大神君家
忠ヲ召テ命有テ曰諸将ノ陣各伍ヲ乱スノ時家
忠獨其陣整テ静也剰ヘ萬卒周章ノ時節
家忠能ク其子細ヲ聞テ速ニ是ヲ達ス故ニ陣
中ノ物忽鎮ルヿ是家忠カ功ナリト其能ク明
察スル事ヲ大ニ美称シ玉フ
廿三日　大神君向阪傳蔵近藤登之助二人ヲ召

テ前夜ノ戦功ヲ褒美セラル秀吉亦向阪近藤
両輩ヲ笠掛山ニ招テ近藤登之助ニ馬（南部里）胴
服（紅裏）ヲ授ク向阪傳蔵ニモ共ニ良馬ヲ与ル
前田利家上杉景勝関左八州ノ數城ヲ陥レ武
威ヲ近国ニ震ヒ降参ノ兵ヲ并テ五万余騎ヲ
卒シ小田原ニ至テ謁ヲ秀吉ニ執ル秀吉ノ美
感微少ナリ利家景勝旦ツ恨旦ツ疑フ秀吉
夜話ノ次テニ近習ノ士ニ謂テ曰今度利家景
勝カ軍功最大ヒナリ然リト云氏其數城ヲ拔テ

皆降ルヲ服ス一城ノ守兵ヲ是ヲ屠リ
殺サハ一宥一滅ノ法ト謂ヅヘシ然ラハ我厚
賞セン利家景勝是ヲ聞テ先非ヲ悔ヒ
テ八王寺ノ城ヲ攻ム此城ハ北条陸奥守兵ヲ卒
居城也氏輝ハ小田原ノ城ニ在テ横地監
シテ八王寺ノ本城ヲ守ラシメ狩野一菴
中山勘ケ由左衛門尉ヲシテ中ノ丸ヲ守ラ
藤出羽守山下ノ陳ヲ守ル降人大道寺
守難波田因幡守木呂子丹波守金子駿河
守山田伊賀守等進テ山下ノ陳ヲ攻ル近藤
守奮戰テ死ス利家景勝兵ヲ卒テ中ノ
攻討狩野一菴中山勘ケ由左衛門尉拒キ丸ヲ
城ニ入テ遂ニ自殺ス横地監物本城ヲ棄
去ル其後大神君狩野中山カ忠死ヲ御感有テ狩
カ子主膳正中山勘ケ由左エ門尉カ子助六郎ヲ召テ
ニ属ス

蒸山ノ城ハ北条美濃守氏規是ヲ守ル福島
衛門大夫正則蜂須賀阿波守家政長岡越
忠興蒲生飛騨守氏郷中川藤兵衛尉

森右近大夫忠政北畠信雄ノ軍勢等是ヲ圍テ
攻討ト云ヒ城兵固ク拒守テ城陥ラス城兵小笠
原十郎左衛門尉横丹越前守城中ヨリ十八町口ニ出
張シテ寄手ノ陣ヲ破テ追討其後寄手ノ諸
将等相議テ此城即時ニ陥リ難シト謂テ柵ヲ結
ヒ遠ク囲テ日ヲ経ル
大神君ノ士小笠原丹波守ヲ秀吉請テ蓮山ノ監
使トス故ニ小笠原蓮山ノ城ノ攻手ニ加リ在リ寄
手ノ軍勢遠ク城ヲ囲テ攻ムルヿヲ猶豫ス小笠

原其臆スルヿヲ怒テ諸卒ノ勇氣ヲ励サンカ為メ
ニ小笠原父子僅ニ微勢ヲ卒テ城ニ攻入リ利ヲ得ル
ト云ヒ後援ナキニ依テ小笠原父子奮戦テ遂ニ
死ス既ニシテ　大神君使ヲ蓮山ノ城ニ赴カシメ竊ニ
氏規ヲ召ス氏規御旨ニ應テ蓮山ノ城ヲ以テ
大神君ノ臣内藤三左衛門尉成信ニ避渡シテ小田
原ニ来テ　大神君ノ御陣営ニ候ス秀吉新庄新
三郎石川兵蔵ヲシテ蓮山ノ城ヲ守ラシム
秀吉小寺如水羽柴下総守勝雄ヲ遣シ小田原

ノ城ヲ告テ白氏改氏直吾陣ニ来リ降ル八伊豆
相模両国ヲ与ヘシ北条安房等是ヲ達ス氏政曰
吾久ク八州ヲ領ス今僅ニ二州ヲ領センヨリハ戦ヒ
死シニハ不如ト謂テ敢テ和ヲ許サス安房等強
テ諫ルトモ氏政遂ニ聴カス

家忠日記追加巻之十一終